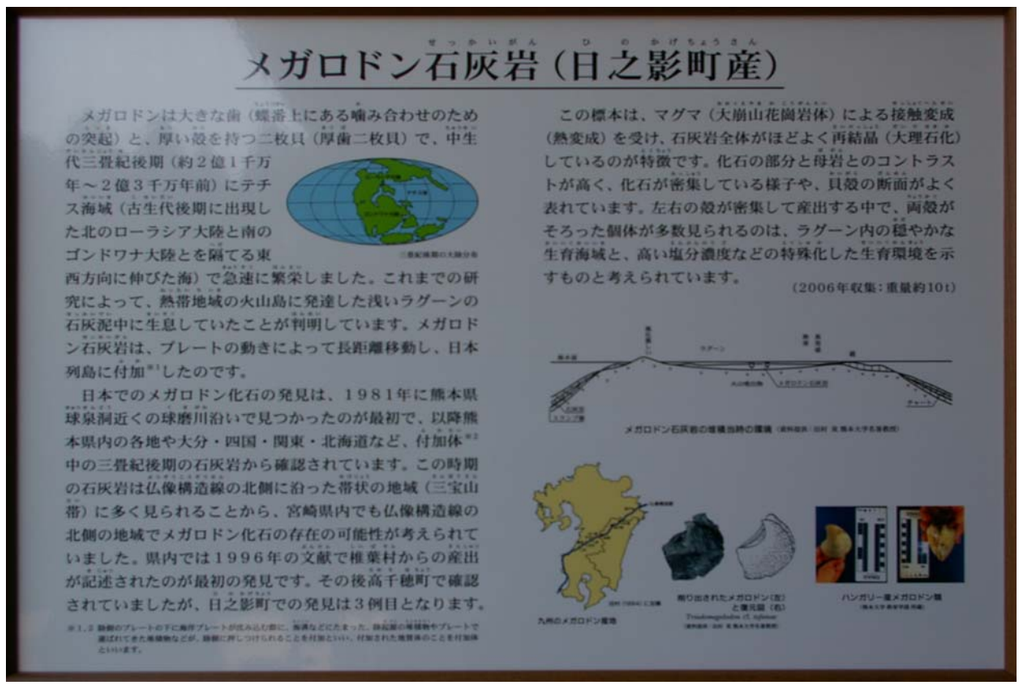
宮崎県総合博物館　メガロドン石灰岩標本

メガロドン石灰岩標本全景



メガロドン石灰岩（日之影町産）

メガロドンは大きな歯（蝶番上にある噛み合わせのための突起）と、厚い殻を持つ二枚貝（厚歯二枚貝）で、中生代三畳紀後期（約２億１千万年～２億３千万年前）にテチス海域（古生代後期に出現した北のローラシア大陸と南のゴンドワナ大陸とを隔てる東西方向に伸びた海）で急速に繁栄しました。これまでの研究によって、熱帯地域の火山島に発達した浅いラグーンの石灰泥中に生息していたことが判明しています。メガロドン石灰岩は、プレートの動きによって長距離移動し、日本列島に付加※1したのです。

日本でのメガロドン化石の発見は、１９８１年に熊本県球泉洞近くの球磨川沿いで見つかったのが最初で、以降熊本県内の各地や大分・四国・関東・北海道など、付加体※2中の三畳紀後期の石灰岩から確認されています。この時期の石灰岩は仏像構造線の北側に沿った帯状の地域（三宝山帯）に多く見られることから、宮崎県内でも仏像構造線の北側の地域でメガロドン化石の存在の可能性が考えられていました。県内では１９９６年の文献で椎葉村からの産出が記述されたのが最初の発見です。その後高千穂町で確認されていましたが、日之影町での発見は３例目となります。

※1,2 陸側のプレートの下に海洋プレートが沈み込む際に、海溝などにたまった、陸起源の堆積物やプレートで運ばれてきた堆積物などが、陸側に押しつけられることを付加といい、付加された地質体のことを付加体といいます。

この標本は、マグマ（大崩山花崗岩体）による接触変成（熱変成）を受け、石灰岩全体がほどよく再結晶（大理石化）しているのが特徴です。化石の部分と母岩とのコントラストが高く、化石が密集している様子や、貝殻の断面がよく表れています。左右の殻が密集して産出する中で、両殻がそろった個体が多数見られるのは、ラグーン内の穏やかな生育海域と、高い塩分濃度などの特殊化した生育環境を示すものと考えられています。

（2006年収集：重量約10t）

メガロドン石灰岩説明

メガロドン石灰岩左側　3次元画像　S=1:10

メガロドン石灰岩接写